

# — 上智大学 —

2月7日 法・外国語(英)学部 国語

## 解答

□

問一 b 問二 c 問三 d 問四 a 問五 b  
問六 b 問七 a 問八 d 問九 a 問十 c

□

問一 d 問二 c 問三 a 問四 d 問五 I b II c  
問六 c 問七 a 問八 c 問九 b 問十 d  
問十一 I b II a

□

問一 b 問二 c 問三 c 問四 b 問五 X a Y a Z d  
問六 c 問七 b 問八 d 問九 d

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

**解説**

※説明の際は本文全体を通しての行数で「○行目」というように説明箇所を示していく。この大問  本文は全 67 行となっている。

問一 傍線部 1「〈書き言葉〉の意味」は 7～12 行目に書かれている。「何度もくり返して写すことができる」(7、8 行目)、「どこまでも広まる」(9 行目)、「解釈が書き足され、人類の叡智が蓄積される」(10、11 行目)等である。さらに傍線部 1 に「たんに物理的に残るというだけでは意味がない」とあるので「物理的に残った状態(=マイナス)」の説明が 4～7 行目 ロゼッタ・ストーン の例で説明されている点も押さえる。とすれば「物理的に残るだけ=多くの人を読めない」ということだから、「〈書き言葉〉の意味(=プラス)」は「多くの人を読める」ということになる。よって正解は b である。a は一見良さそうに見えるが「徐々に変化して」が本文に書かれていない内容なので×。c は「媒体の発明」に焦点化してしまっているので×、d も書かれている内容が「読まれる」ことに全く言及していない点で×。

問二 語彙の問題。「幾何級数的」の意味は「前に数倍する勢いで増大・変化し続けるさま」。よって正解は c である。

問三 傍線部 3 の「〈書き言葉〉の歴史」は 24 行目「それは、人類の歴史を見れば～」以降に、「そのような機能」の指示内容は 16～21 行目に書かれている。つまり「一つの共通した〈書き言葉〉によって人類の叡智が蓄積される」(=「機能」)、「〈書き言葉〉は原型となる文字が変化してできた」(=歴史)の 2 点をふまえて判断すれば良い。この内容に最も近いのは d で、これが正解。a は「数学」を使って説明しているが、「数学」はあくまで「例」「たとえ」にすぎず部分的、不十分で d より劣るので×。b は「一つの〈書き言葉〉を求める」が 25 行目に反するので×。「求める」のではなく「一つの原型が変化してきた」のである。c は「さまざまな〈書き言葉〉が～発達してきた」が 25、26 行目に矛盾するので×。本文では「世界にあるさまざまな文字」は「原型となる文字が変化してできた」と言っているのであり、c とは意味が異なる。

問四 傍線部 4 の「歴史的」は、問三でも触れた通り 24 行目以降に書かれている。「文字というものが、そうかんたんに生まれるものではない」「原型となる文字が変化してできた」という部分である。さらに傍線部「外の言葉」は 34 行目以降で説明されている。「外から伝来」「二重言語者」、さらに 37～39 行目を見れば「別の言語が入ってくる」ということだと分かる。この内容に最も近いのは a でこれが正解。b は「文化というものは偉大な文明からその周辺へと伝わっていく」が、d は「たいていの言語において～本質的に異なっている」が、それぞれ本文に書かれていない内容で×、c「交易の記録や呪術的なもの」は 37～39 行目の例に書かれてはいるが、あくまで「例」にすぎず、これらに限定して述べてしまっただけは部分的で狭く不十分のため×。

- 問五 傍線部 5「二重言語者」の説明は 43～58 行目に書かれている。その中でも 44 行目、49 行目、51 行目、55 行目に 4 回繰り返されている通り、「二重言語者」は「〈書き言葉〉で書かれた図書館へと出入りできる」人である。そしてその「図書館に出入りすること」は「すなわち、読むという行為」なのであり、「読むという行為」は「〈普遍語〉を読むということ」なのである(55、56 行目)。この内容に最も近いのは b で、これが正解。「潜在的に多くの書物に接近可能」は 47～49 行目に書かれている通り、「図書館」の説明として正しい。a は「二重」の内容を「〈話し言葉〉と〈書き言葉〉」としている点で×。「往復」も、再び「〈話し言葉〉」に戻ってしまうことになり、この点でも誤り。c は「背後にある思想を理解」「文化の発展に貢献」が本文に書かれていない内容で×、d は「図書館」に該当する言葉や、同じ意味になる表現が使われていないので×。
- 問六 傍線部 6「ふつうの宝物とはちがう」とは、傍線部 6 直後 41、42 行目にあるように「モノ」そのものとしての価値(=「金の箱」の価値、ふつうの宝物の価値)ではなく、「読むという行為」にその「本質」がある、ということである。この内容に最も近いのは b で、これが正解。a は「読むという行為」に触れていないので b よりも劣り×、c は「地域に叡智をもたらす」が、d は「技能を発達させる」がともに本文に書かれていない内容で×。
- 問七 傍線部 7 を「限り」「強いた」(どちらも、必然、因果関係を示す)という表現からどういうことか読み取ると、「叡智を求めるには、母語以外に、〈書き言葉〉(=〈普遍語〉)が読める人=二重言語者でなければならない」ということである。この内容に最も近いのは a で、これが正解。b は「二重」の意味を「〈話し言葉〉と〈書き言葉〉」としている点で×、c は「母語を表現する〈書き言葉〉の他に」が本文に書かれていない内容なので×。d は「さまざまな言語の〈書き言葉〉を操る」が×。「二重言語者」が出入りする「図書館」は「蓄積された書物の総体」(46 行目)ではあるが、それが「さまざまな言語」で書かれたかどうかまでは言及されていない。
- 問八 空欄 8 直前に「〈話し言葉〉とは異なった」とあるのだから、空欄 8 は「〈話し言葉〉」の反対のものである。さらに 66 行目に「それは〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を書き表すものだという、のちに生まれた考え方を過去に投影したものの言い方」とあるのだから「〈話し言葉〉とは異なった 8 で書かれている」=(投影)=「〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を表す」ということになり、空欄 8 に入るのは「〈書き言葉〉」=「文語」である。よって正解は d である。
- 問九 a の内容は 29～32 行目にあるが、「より正確な言い方をすれば」以降に「たんに文字が伝来するからではない」とあり、次の文にも言い換えとして、「その文字とやらを使って〈自分たちの言葉〉を書いてみよう、などといって文字文化の仲間入りをするわけではない」とある。したがって正解は a である。b は 47～49 行目にあるが、「さまざまな〈書き言葉〉で書かれた書物」とは読み取れないので×。c「数学」の例は 19～21 行目にあるが、そこには c にあるような「数学的真理を表現」という表記、内容は無いので×。d の内容は 64～67 行目に書かれているが、d のような「人類の叡智の蓄積が高度に進んだため」という理由は書かれていないので×。選択肢 a の文意が読み取りづらく難問になっている。

問十 aは4～7行目と矛盾するので×。aのように、単に「後世に残るといふ〈書き言葉〉の特質」としてしまふとロゼッタストーンの例にあるような「物理的に残る」という意味になってしまう。bは後半「他方～衰退させる」が本文に書かれていない内容で×。cは19～21行目にほぼそのまま書かれており、これが正解。dは後半「文明は人々の間に不平等を生む」が本文に書かれていない内容で×。

## 二

### [出典解説]

『大鏡・右大臣師輔(もろすけ)』の一部。出題された本文からは分かりにくいですが、この場面は実際には「侍」と「世継の翁」の間答の形式で進行している。

### [設問解説]

- 問一 「いかでかは」は反語。「さらで」は、未然形+ば...となり打消の意味が加わる。bでもよさそうに思えるが、それでは疑問と区別がつかない。
- 問二 傍線部の一つ前にあたる文(=「そのみかど～栄えおほしませ」)は「そのみかど(=冷泉天皇)がいたからこそ、現在の藤原氏が栄えているのだろう」ということ。傍線部は「これがもし、そうでなかったら」という反実仮想。もしも冷泉天皇が即位していなかったら、今ごろ自分(=道長)たちは四位か五位の諸大夫に過ぎなかったはず...と道長自身が想像して言ったセリフの一部である。
- 問三 前問(問二)とも関連するが、諸大夫は四位・五位が極位である(このことは注からも分かる)。道長の実際の家柄から見ればかなり下であり、もし本当にそうなら道長にとっては「零落(れいらく=落ちぶれること)」であろう。なお「墮落」では意味が違う。
- 問四 傍線部を含む一文にある「形」が「容貌」を指す...と分かればそれでも解ける。もう一つの考え方として、実力者・権力者の道長に対して、源民部卿が「イヤイヤ、あなたのような立派なお方が家来だなんて...仮定の話だとしても困りますよ...」と笑いながら返したのだから、d以外の選択肢では源民部卿は道長を持ち上げたことにならないではないか...というのでもよい。
- 問五 「おほやけ」は朝廷・国家を意味する。通常、人であれば天皇(皇后・中宮)を指すことになるので「おほやけ=冷泉院」を選びたくなるが、この設問においては正しくない。なぜなら「冷泉院」を「おほやけ」ととった場合、それと対になる「わたくし」は、残る選択肢の全てが該当してしまい、この中から一つ(だけ)を選ぶことができなくなってしまうからである(しかも、三人とも冷泉院とは時代が合わない)。そこで別の考え方をしてみる。この選択肢のうち同時代になる組み合わせは「入道殿(=道長)」と「源民部卿」だけである。本文では、道長に続く家系(藤原北家)が栄えるこの時代の体制が冷泉院の時代に確立された...という話であるから「おほやけ=入道殿(道長)」「わたくし=源民部卿」と考えればきちんと文脈にあう。なお通常、摂政関白を直接指して「おほやけ」とは言わないが、摂政関白は「おほやけの後見」である。

- 問六 問二解説も参照。道長自身も「冷泉天皇が即位していなかったら今の藤原北家の繁栄はなかった」と言うのである。これを受けて語り手(=世継の翁)も「現在の体制があるのもその時代に藤原北家の覇権が定まったからだ」と言ったわけである。
- 問七 「大嘗会の御禊」は注にもあるが、この儀式を執り行っているのは帝である。本文(および選択肢)で帝(およびその経験者)に該当するのは「冷泉院」以外にいない。
- 問八 まずは状況を理解する必要がある。この場面にいるのは、すでに亡くなっている師輔なのである(注を見れば、師輔の没年、冷泉院の在位を確認できる)。幽霊と化した師輔が冷泉院の背中に抱きつきながら、御輿まで運んだのである。「うつつ」は「現(うつつ)」であり、夢に対する現実の意味もあるが、死後に対して「生前(=生きているあいだ)」の意味にも使える。
- 問九 「元方卿」「桓算共奉」については注を確認すればよい。傍線部を含む一文(=「さらば、元方卿...べきな。」)を意識すれば「だったらこの二人の怨霊(=元方卿と桓算共奉)を追い払えるか」となる。この文脈に合うのは**b**。**a**では合わない理由は二つある。一つは、通常「物の怪」と言った場合、祟りなどをもたらす怨みを含んだ死霊・生霊の類であり、師輔は幽霊として登場するものの、これには該当しないからである。もう一つの理由は、問十一との関連である。問十一の設問指示を見ると、出題された本文の最後の部分には二つの解釈があり得る...となっている。(後で解説するが)うち一方の解釈する場合には、生前の師輔として考えなければならぬため、そうすると **a** では矛盾してしまうことになる。
- 問十 傍線部の「それ」が指すのは一つ前の文に含まれる「元方卿、桓算共奉逐ひのけさせたまふべき」(これを含む一文の意識は問九解説参照)。正解の **d** で意味が通るのは確実であるが、やはり(前問と同じく)問十一との関連で「師輔の生前」という状況を仮定した場合に矛盾のある **a・b・c** の選択肢は消去せざるを得ない。
- 問十一 仮に日本史の知識がなかったとしても、注にある人物の生年・没年などを参考に答えを導くことはできる。怨霊化した二人については、桓算共奉は生没年未詳とあるので、元方卿を手がかりにすればよいであろう。Ⅰ=まず〈冷泉院について述べたとする解釈〉から。注から冷泉天皇の生没年を確認してみると、取り立てて言うほど「短命」ではない。次に在位を確認すると二年あまりで...これなら「もっと治世がつづいてほしかった(だから「もったいない」)」という文脈に合いそうだと判断出来る。Ⅱ=次に〈九条殿について述べたとする解釈〉について。元方卿の没年と師輔の没年には七年ほどしか差がなく「もっと長生きできたはずなのに元方卿の物の怪に殺された(だから「もったいない」)」と言えそうである。以下は参考。藤原元方が失意ののちに亡くなり、死後怨霊化して冷泉院や師輔さらにはその子孫にまで祟りをなしたというのは史実であり、実際に有名な言い伝えでもある。特に冷泉院は精神の病を患っていたとされるが、元方(の怨霊)の影響が当時の人々の間では意識されていたのである。



### 三

#### [出典解説]

『高僧伝』は梁の慧皎(えこう)の撰。慧皎以前にも「名僧伝」のように数種の僧伝が既に存在していたが、慧皎は、それら先行する類書の編集方針に満足できず、自ら新たに「高僧伝」を撰しようと思立ったと、巻末に収められる自序において述べている。具体的には、「名僧伝」等は、世間で有名な僧、あるいは著名な僧の伝記を集めている。しかし、仏教の教えの観点から言えば、たとえ無名であっても、すぐれた僧、高僧はいる筈である。そういった僧の伝記が失われてしまうのを恐れて、「高僧伝」という名を立て、また、その観点から見て相応しいと判断した僧の伝記を収録した、と述べているのである。出題された箇所はこのうち釈法朗という僧のことを伝えるものである。朗がまだ若かった頃から西域で亡くなるまで、複数の短いエピソードが次々と語られていくが、それぞれのエピソードの間に直接的な繋がりはない(エピソードごとに、登場人物も次々と変わっていく)。

#### [設問解説]

- 問一 「徵瑞」は、何かよいことが起きる兆(きざ)し。この「徴」は、きざし・しるし...の意味で使われている。これに合わないのは「徴集」。この「徴」は、とりたてる・供出させる...の意味である。
- 問二 仏教においては「光」は英知の象徴。また本文がすぐれた僧の伝記であることから類推してもいい。
- 問三 傍線部は「人其(その)階(のぼ)る所を測る莫(な)し」とよみ、人々は朗がどこまでレベルを上げていくかわからなかった(それほど朗はすごい!)ということなのだが、aでは合わない。まず「僧の位」が問題なのではない(地位ではなく、中身)。もう一つ、このエピソードは順序からいってもまだ朗が若い時...と推測できる。「どれほどに到達しているか」という過去の実績のようなものではなく、これからさらにどこまでいくんだろう...という将来(が想像できないほどすごい!)について人々は言っていると考えるのが妥当だろう。
- 問四 傍線部の二文字前にある「進」に「モ」と送り仮名がついているのがヒント。師弟を並立して言えることでなければ合わない。cの「高い位」(これだと同時点では師の方が高くて当たり前)、dの「高い志」(志に燃えるのは若い朗の方であろう)がこの点で消去できる。要は、ともに「行いのすぐれた」よい師匠とよい弟子だった...で十分のようである。
- 問五 X=本文の「竟」は「竟(つい)に」と読み、しまいに・とうとう...のように訳すことが多いが「最終的に落ち着くところ・結論」の意味である。a「畢竟(ひっきょう)」は、つまるところ・結局...などのように訳すことが多いが、これと同じ意味である。b「竟宴」c「竟日」の「竟」は「終わり」であり、それぞれ「宴の終わり」「一日中」といった意味。Y=慧遠は釈法進に袈裟を贈ったのだからaでよい。「遺失」は、なくす。「遺産」は、遺(のこ)す。「遺棄」は、捨てる。Z=傍線部のすぐ後、五字下には「屍(=死体)」の文字があり、釈法朗は亡くなったのだと分かる。「臨終」は、死に臨むこと・死にぎわ。

- 問六 本文で具体的に語られる二つ目のエピソードにあたる。弟子の朗が「遠僧と一緒にきました。遠僧に食事を差し上げてくださいませんか」と言い、師匠の進は弟子の言う通りにしたものの、食事の席ではただ食器の音がするのみで、人(=遠僧)の姿は結局最後まで見ることはできなかった...のである。なお「遠僧」は「慧遠」と名前が似ているが「慧遠」は、次に語られる別のエピソードに登場する。「遠僧」とは別人の僧である。
- 問七 本文で具体的に語られる二つ目のエピソードにあたる。廬山に住む慧遠(えおん)から贈られた袈裟を、釈法進がお布施としてまた別の聖僧に差し上げようとしたのだが(=慧遠に渡す...のではない。それでは単にもらったものを返すだけ...になってしまう)、その僧(=この人は慧遠とは別の聖僧)はもう帰ってしまっていない...と弟子の釈法朗が言う。後日、炊事係に釈法進が袈裟を手渡している姿が目撃されるのだが、いつも働いている炊事係に問うても、誰も釈法進から袈裟はもらっていないと答える。つまり、袈裟を受け取った炊事係は、実は先日立ち去った聖僧の化身であったのだ...という内容。
- 問八 「当」は再読文字で必ず返って読まなければならない、まず c はこの点で合わない。次に、亀茲王は「私(の為)に(教えを)説いてほしい」というのだから「為我」を「我の為に」と読むことになり「為」と「我」の間には「為レ我」というレ点が必要だったことになる。正解を全て書き下せば「若し得道者の至ることあらば、当(まさ)に我の為に説くべし」となる。
- 問九 傍線部の次の文で、人々が骨(=遺骨)を収め塔(=お墓)を建てているのだから、感嘆の対象は、亡くなった釈法朗だったとすぐに分かる。釈法朗のことを言っているのは正解である d しかない。

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

増田塾 2019 解答速報ホームページ 

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！